双葉通信【第 130 回】“ふくしまに恋をして”　20210815

上　田　　勉

本に飢えていた時代　本について、新聞の記事から 2 つ。

① 北海道の地方に住んで居る女子中学生。学校図書室の本を全部読んで、読む本が無くなって、同じ本を何回も読んでいる。たまに親が札幌へ連れて行ってくれると、本屋に行くのが何よりの楽しみ。②広島県で瀬戸内海の島を巡る移動図書館船が運航されていた。1 日をかけて 14 の島を巡る。港に着いて船から音楽を流すと、多くの子供達が船に駆け寄ってくる（今は島に橋が架かったので、船は廃止）。

本に飢えていた時代があったんですね。私は、電車の中で文庫本を読んでいる中高校生を見ると、思わず感動します。

ジュンク堂書店（宮城県）仙台 TR 店　7 月 18 日閉店

さよならジュンク堂　仙台発出版こぼれ話　編集者・作家　土方　正志

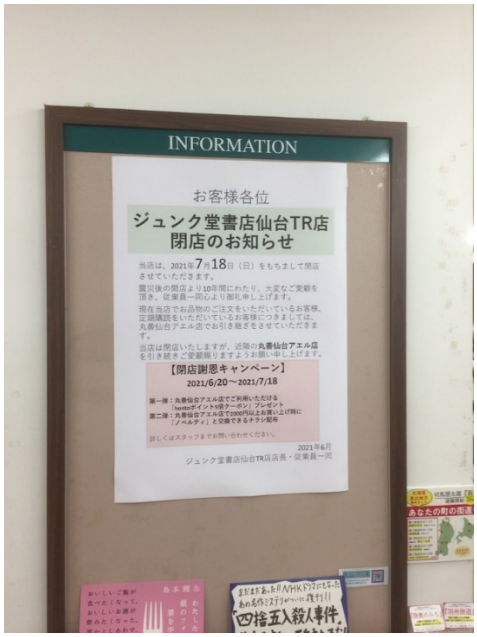
「悲しい、あの「ひじかたホイホイ」棚が消える。ジュンク堂書店仙台 TR 店（仙台駅前地下 1 階）にある、なぜかいつも私好みの本が並ぶ棚である。「これ、誰が読むの」的なマニアな海外文学などがずらりこれ見よがしに面陳列されている。「お、こんな本が」とレジにいそいそと急げば「ふふふ、絶対に買ってくれると思ってました」と、店員さんがにんまり。私が出没するあたりにそのテの本を並べておけば間違いなく買うはずと、すっかり好みがバレている。これを称して「ひじかたホイホイ」である。私にとっては仕掛けられたワナなのだが、いつも楽しませてもらっていた。

報道などでご存じかと思うが、仙台のジュンク堂がまさに今日この日、さいごの営業である。神戸市を創業の地とするジュンク堂、仙台進出は 1997 年、かつては駅前イービーンズと仙台ロフトにもあったけれど、それもいよいよ今日を限りに、ジュンク堂が仙台（宮城県からも）から消える。あのグリーンのエプロンも、ジュンク堂のブックカバーも消える。

仙台駅前の本屋さん、ずいぶんと減った。高山書店ありアイエ書店があり、仙台書店に協同書店もあった。なにより伝説の八重洲書房があった。思えば仙台のみならず、どこの町でも本屋さんは駅前のにぎわいの一つの要だった。それも夢かマボロシか、どころか今や「書店ゼロ自治体」の急増が問題となるご時世である。なにしろ最大の原因は世にいう出版不況。95 年をピークに本の売り上げは下落を続け、業界いずこも生息吐息、なぜにこんなことにと活字離れだネット普及だと論者さまざまに喧（かまびす）しい。だが、現実はご覧の通りである。

日曜日のこの欄をお読みの皆さんなら本好きのはず。ちょっとご想像いただきたい、町から本屋さんが消えてしまったら、と。ネットで買えるその利便性と引き換えに、町の余裕と潤いを手放していいものか、どうか。さらにいえば本屋さんも地域経済の一角、いまいちど基本に立ち返り、南米の大河アマゾン（amazon）から広瀬川の岸辺に目を転じて、本はお近くの本屋さんで、ぜひ。」（「河北新報」21 年 7 月 18 日付け）

閉店するジュンク堂書店仙台 TR 店（仙台 TR 店提供）】



【何しろ、仙台駅前に、丸善とジュンク堂の二大書店が競っていたわけなので。丸善傘下にジュンク堂が入った以上、並立は非効率だよね。
https://ameblo.jp/agrotis64/entry-12687231325.html】

【怒り】オリンピックとパラリンピックの開会式。選手団の行進は国名のアイウエオ順。しかし「アメリカ」は最後から 2 番目の行進。NBC 放送が、米国のゴールデンタイム（日本時間の午後 10 時頃）に米国選手団の行進を合わせるため